ユリノキの町から　風の便り 70

2024（令和6）/8/1、
八千代・ゆりのき台　辻　秀幸

アカトンボ（アキアカネ）（昆虫綱 トンボ目 トンボ科 アカネ亜科 アカネ属）

メス　船橋・浜町1. 京葉道路南法面
2018/10/22.

山腹でボーっとしていたら頭上をアカトンボの大群が延々と続いた、という夢のようなうらやましい話を友人がしてくれました。

夏に山へ移動するのはアキアカネで、その留守の平地にいるのがナツアカネだということになっています。

両者の区別は、顔つきと胸部の横にある模様が手がかりです。記録した写真を改めて確認しようとしても、エセムシ博士の私には区別が判然としないものがあります。アカトンボの世界も個性的です。赤色とは言いますが、絵に描かれるような赤いのには、出会ったことがありません。赤いけれどアカトンボとは呼ばないものもいます。

オス　船橋・浜町1.
マンション3F通路
2016/6/24.

左上下の写真はアキアカネです。下写真で、腹部のおなか側に小さい突起が写っていますが、トンボ科に共通のオスの特徴で、副性器というものだそうです。

ところで「アカトンボ」と口に出す時、どう発音していますか。私は平板に発音します。童謡「赤とんぼ」では1音目の「ア」を高く歌っています。そして作曲家が、2音目にアクセントを置くと「垢とんぼ」になってしまうよ、と言ったと知りました。いちゃもんをつけたいところですが、それは置いといて辞書ではどう扱っているでしょうか。高く発音する音を赤字で示します。

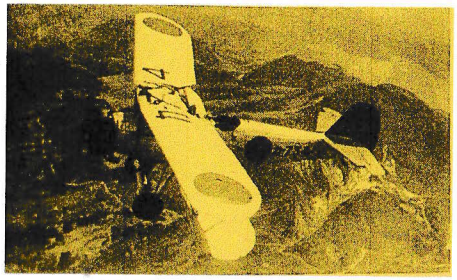
『日本語発音アクセント辞典』
日本放送協会　昭和41
赤蜻蛉　アカトンボ
赤　アカ
垢　アカ

『新明解国語辞典』
三省堂　1981（昭和56）
赤蜻蛉　アカトンボ、アカトンボ
赤　アカ
垢　アカ

発音は時代や場所によって違ってくるでしょう。二つの言葉がつながってひとつになるとアクセントが変化することもあります。

トンボは古くはあきず（あきつ。秋津、蜻蛉）と呼び、日本を、あきつしま（あきずしま。秋津洲、秋津島、蜻蛉洲）ともいいます。トンボだらけだったのでしょうか。

名前の由来については、神武天皇や雄略天皇にまつわる諸説があります。いずれも害虫を退治して実りの秋に似つかわしいトンボをイメージさせる伝承だと解説されています。



空技廠93式陸上中間練習機（K5Y）
『航空情報別冊 太平洋戦争 日本海軍機』
酣燈社　昭和47　から

もう一つのお話。私にとって赤とんぼとは、旧日本軍の練習機です。

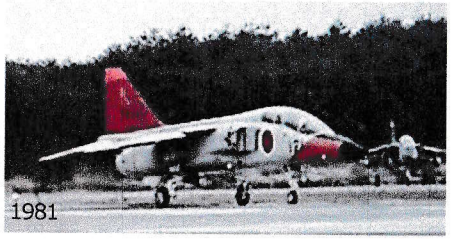
広辞苑 第五版（岩波書店 2002年）の「赤蜻蛉」の項に「赤く塗って練習機として用いた複葉の飛行機の俗称」とあります。古典機ファン以外には死語でしょう。

陸軍で昭和10（1935）年に初飛行した「立川キ9」練習機の試作機を「赤橙色」に塗ったのが最初とされます。蜂をヒントにしての、警戒を周囲に呼びかけしるし。車の仮免運転の標識みたいなものでしょう。

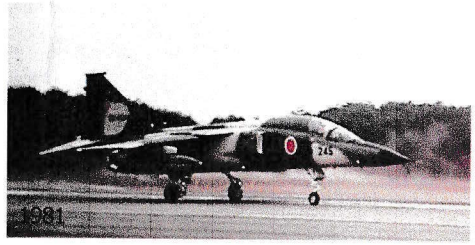
海軍では昭和9（1934）年制式採用の「空技廠93式陸上中間練習機」を全身「オレンジ色」に塗ったそうです。盛んに使われたので、派手な飛行機がフワフワ飛ぶ姿が国民の目につき親しまれ、歌にもなったとか。今の若い人ふうに言うなら「カワイー！ 赤とんぼミターイ　がんばっちゃって～」ということだったのでしょうか。

白黒写真の時代で、色つきの写真はないので、ずっと後の国産練習機で想像してみましょう。下写真左が、「三菱T2」という練習機。戦闘機仕様にした右の「三菱F1」と比べて「カワイー」かな。曇天の夕刻、訓練が終わって戻ったところです。

F1は強力な、恐ろしい兵器です。日本に近づく不審機に毎日のようにスクランブル発進していました。練習機のT2も基本的にF1と同じ性能です。旧日本軍の二枚翼でのんびり飛ぶ長閑さはありません。ヒコーキオタクもアカトンボと呼ぶことはないようです。現在はT2もF1も退役。後継機が飛んでいますが、さらに性能アップが必要だとされて国際共同での次世代機の開発のことが新聞に出るようになりました。



1981



1981